

「国立民族共生公園」によるアイヌ文化の理解促進 –2020年4月一般公開

篠宮 章浩 国土交通省北海道開発局 事業振興部 都市住宅課

1. はじめに

「民族共生象徴空間」は、現在、北海道白老郡白老町のポロト湖畔で、2020年4月の一般公開、年間来場者数100万人を目指し整備が進められています。



「国立民族共生公園」は、この象徴空間の中核区域の一部として位置づけられ、このほか「国立アイヌ民族博物館」（文化庁）も同時に整備が進められています。

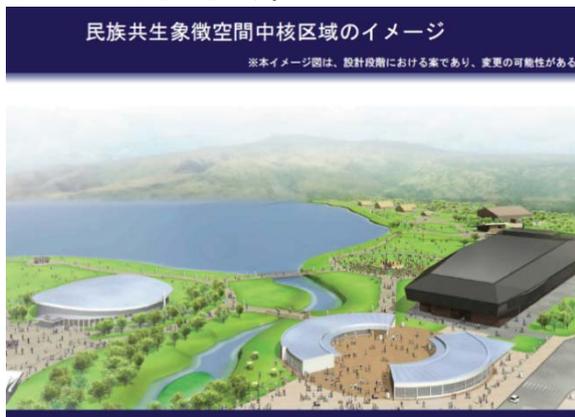
象徴空間は、平成19年の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」、翌年の「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を受け、有識者懇談会で検討を重ねた後、アイヌ政策推進会議（内閣官房長官座長）を経て、平成26年にアイヌ文化の復興等に関するナショナルセンターとして整備することが閣議決定されました。

アイヌの人々は、日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住して独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族です。アイヌ文化は、アイヌの人々が長い歴史を通じて培い伝えてきた、自然を尊び、自然と共生する精神を反映した文化であることが特徴です。

昨年11月に北海道で開催された都市計画学会全国大会では、札幌大学ウレシクラブによるアイヌの古式舞踊の披露もあり参加者の皆様にはアイヌ文化の一端に触れていただけたかと思います。

2. 国立民族共生公園の概要

北海道開発局では、公園の基本構想から検討をはじめ、平成28年度に整備着手し、現在、造成工事、施設の建築工事を行っているところです。



(第9回アイヌ政策推進会議資料より)

公園は、湖畔沿いに面積約9.6ha、「体験型のフィールドミュージアム」をコンセプトに、自然と共生してきたアイヌ文化を尊重し、国内外から訪れる多様な来園者の理解を促進するとともに、豊かな自然を活用した憩いの場の形成等を通じ、将来へ向けてアイヌ文化の継承及び新たなアイヌ文化の創造発展につなげるための公園的な土地利用の実現を図ることとしています。

(主な施設概要)

- 伝統的コタン（集落）・・・チセ（家）群等の再現によりアイヌの伝統的生活空間を体感できる施設
- 体験交流施設・・・概ね500～600名程度収容できる体験交流ホール、アイヌ語、伝統的生業等を体験できる体験学習館
- 工房・・・来園者が工芸（木彫、刺繍・織物等）の製作を体験できる施設

3. 「イランカラプテ」国民理解と国際交流の促進

「イランカラプテ」はアイヌの人々のあいさつで、「こんにちは」という意味です。



民間企業や行政機関、学術機関等の連携により、「北海道のおもてなし」のキーワードとして普及させるキャンペーンを展開してきており、道内でも少しずつ広まってきました。（「プ」は小文字）

最近では、アイヌ文化が登場する冒険マンガの数々受賞、アニメ化の話題だけでなく、アイヌ文化への関心の高まりを感じるようになってきました。

日高地方の路線バスの一部区間では、アイヌ語の車内放送を流すようになりました。札幌市の地下鉄南北線さっぽろ駅コンコース部では、アイヌ文化を発信する空間の整備が進められています。そして象徴空間の一般公開500日前となる今年12月11日には愛称を公表することも決まりました。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催、象徴空間の一般公開を通じて、アイヌ文化等への理解促進がますます広がることを期待します。

- ・内閣官房アイヌ総合政策室

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainuushin/index.html>

- ・アイヌ施策関連（国土交通省北海道開発局ウェブサイト）

<http://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ai/ainu/ud49g7000000ao02.html>